

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02116

研究課題名(和文) タデウシュ・カントルにおける身体と記憶-美術と演劇の相関関係

研究課題名(英文) Tadeusz Kantor, Body and Memory - relationship between art and theater

研究代表者

加須屋 明子 (Kasuya, Akiko)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：10231721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀後半を代表するポーランドの美術家・演劇家であるタデウシュ・カントル(1915-1990)の創造活動における身体と記憶に注目し、「死の劇場 カントルへのオマージュ」展の実施によってカントルの目指したものの今日的再編集、再解釈を行った。特に前衛的パフォーマンスの重要性や現代美術における身体表現の可能性について検証し、「昼の家、夜の家」ワークショップでは非言語コミュニケーションの連鎖の場で、演劇と美術の交わる場での共同作業の可能性を探った。「セレブレーション」展を実施し、日本とポーランド両国の歴史、伝統、神話、死や日常的現実に着目し、芸術表現の可能性について検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カントルについての研究は盛んではあるが、演劇と美術の両者に着目し、更にパフォーマンスの意義も組み込んだ論考は未だ希少であり、特に日本では、演劇論におけるカントルの位置づけが先行し、美術の文脈では『タデウシュ・カントル 我が芸術=旅=我が人生』展(セゾン美術館 / 伊丹市立美術館)が特筆されるが、それ以後は言及される機会も少ないため、カントルの全体像に迫る本研究は重要である。また彼の同時代への影響とその後の発展について、特に彼の創造行為の重要な鍵となる記憶、歴史、伝統、神話、死、日常的現実に着目してカントルの再解釈、再評価を実施し、更に現代美術の可能性について示唆を行った社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the body and memory in the works of Tadeusz Kantor (1915-1990), a Polish great artist and theater director representing the latter half of the 20th century, I tried to re-edit and reinterpret them by carrying out the exhibition "Theater of Death: Homage to Kantor." Especially, examining the importance of the avant-garde performances and the possibility of physical expression in contemporary art, in the "House of Day, House of Night" workshop, where there was a chain of non-verbal communication, and theater and art were mixed, I explored the possibility of collaborative work. In the "Celebration" exhibition the possibility of artistic expression was examined by focusing on the history, traditions, myths, death and reality of both Japan and Poland.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：ポーランド 前衛 現代美術 演劇 タデウシュ・カントル 中欧

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

研究遂行者はポーランド及び中央ヨーロッパの現代美術を中心にこれまで研究を続けてきた。1989年から1991年まで、ポーランドのヤギェウォ大学哲学研究科美学研究室に留学してロマン・インガルデンを中心とした美学芸術学の研究を行ったほか、同時代の美術状況についての調査も行い、帰国後1991年より2008年3月までは国立国際美術館学芸員として、多くの展覧会を企画して中東欧美術の紹介につとめ、ポーランドからも優れた美術作家を招聘して講演会を開催するなど、ポーランドを中心とする旧東欧地域の芸術状況について継続的に調査研究を続けてきた。2009年から2013年まで科学研究費助成金を得て、「ポーランドの前衛美術」をテーマにより時代を広げた包括的な研究を実施、歴史的経緯をふまえつつ、最新の現代美術の状況に至るまでそれがどのように展開しているのかに注目した。すなわち、前衛のはじまりとされる両大戦間期から、戦時下、冷戦期、雪どけの時代を経て現代に至るまでを視野に入れ、分裂や占領などを経験しながらも芸術がどのように受け継がれ、また社会においてどのような役割を果たしてきたのかという点に注目し、中でもスタニスワフ・イグナツィ・ヴィトケヴィチ(ヴィトカツィ)(Stanisław Ignacy Witkiewicz (Witkacy) 1885-1939)、ヴワディスワフ・スツシエミンスキ(Władysław Strzemiński 1893-1952)、ミロスワフ・パウカ(Mirosław Bałka, 1958-)、アルトゥル・ジミェフスキ(Artur Żmijewski, 1966-)らの活動を取り上げ、作品について調査研究を実施し、ポーランドの前衛美術の独自の展開と、政治的背景との関わりについても考察した。その成果は2014年に創元社から、加須屋明子『ポーランドの前衛生き延びるための「応用ファンタジー」』として出版し、広く成果を公開することができた。こうした研究の過程で、非常に重要かつ特異な存在として再認識されたのが、20世紀後半を代表する美術家・舞台監督のタデウシュ・カントル(1915-1990)である。本研究は、上記の成果を踏まえながら、視覚芸術のみならずパフォーマンス、演劇と身体を用いた上演芸術の分野でも活躍したカントルに注目し、彼の活動の意義と成果についての今日的解釈と再編集を試みる。カントルは、ポーランドを拠点として美術や演劇の世界で活躍したが、その活動は各分野で高く評価され、20世紀の最も重要な作家の一人として位置づけることができる。彼の作品と舞台とは、同時代並びに続く世代への影響も広範であり、例えばマルセル・デュシャン(Marcel Duchamp, 1887-1968)、フセヴォロド・メイエルホルト(Vsevolod Mejerhold 1874-1940)、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer, 1888-1943)、ジャクソン・ポロック(Jackson Pollock, 1912-1956)、クリスト(Christo, 1935-)、アラン・カプロー(Allan Kaprow 1927 - 2006)、ピナ・バウシュ(Pina Bausch, 1940-2009)らとの関連で語ることができ、またポーランドのヴィトケヴィチやブルーノ・シュルツ(Bruno Schulz, 1892-1942)との関係も見逃せない。

これまでカントルについての研究は盛んに行われてきたが、それらの多くは演劇を中心に論じたもの、例えば、ヤン・クウォソヴィチ(Jan Kłossowicz)のTadeusz Kantor Teatr, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa, 1991、ヴィエスワフ・ボロフスキ(Wiesław Borowski)のTadeusz Kantor, Wydawnictwa artystyczne i filmowe, Warszawa, 1982などが、もしくは美術作品を中心としたもの、例えばレフ・スタングレット(Lech Stangret)のTadeusz Kantor Malarski ambalaz totalnego dzieła, ART+EDITION, Kraków, 2006や、ヤロスワフ・スーハン(Jarosław Suchan)編のTadeusz Kantor. Niemożliwe/Impossible. Bunkier Sztuki Galeria Sztuki Współczesnej, Kraków, 2000など、演劇か美術かいずれかの活動に焦点を当てたもので、この両者をつなぎ、更にパフォーマンスの意義も組み込んだ論考は未だ希少であった。特に日本国内では、まず演劇の分野で注目され、紹介が進んだことから、舞台監督としての紹介が進み、演劇論におけるカントルの位置づけが先行した。美術の文脈からの紹介では1994年から95年にかけての『タデウシュ・カントル 我が芸術=旅=我が人生』展(セゾン美術館 / 伊丹市立美術館)が特筆されるが、それ以後は美術の分野で言及される機会も少ないため、両者を含む包括的な研究が必要であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、タデウシュ・カントル(1915 - 1990)の創造活動における身体と記憶に注目し、カントルの目指したものの今日的再編集、再解釈を行うとともに、美術と演劇との相関関係を探ることを目的とする。そのことによってカントルの再評価を目指し、特にその前衛的パフォーマンスの重要性や現代美術における身体表現の可能性について論じる。その際、そこに表象された記憶、すなわち歴史、伝統、神話、死、日常的現実に着目し、20世紀から21世紀にかけての芸術表現の可能性について検証する。

カントルの活動は、1920年代から30年代の両大戦間期における国際的な前衛運動の影響を受けつつ出発し、アンフォルメル、アンパラージュ、ハプニングなど50年代から60年代にかけての第二の前衛の波を先導し、実践していった。カントルは戦後のポーランドで次々と実験的試みを続け、絵画、素描、ハプニングなど多岐に渡る創造的活動を精力的に行った。1955年実験的劇場「クリコ2」を創設、1961年には「アンフォルメル演劇」宣言を発表し、1963年には「ゼロ演劇」宣言を行うと共に、クシシュトフォール画廊にて「大衆展」(あるいは「反展覧会」)を開催した。いわゆる完成した作品を展示するのではなく、「作品とは呼べないような未完成のもの、失敗作、周辺にあるもの」、「偶然のスケッチ、書類、手紙、写真、新聞」など、後にカントルが最下層の現実と名付ける、日常生活の断片的なものたちが会場を埋め尽くした。この

直後、カントルはアンバラージュ（梱包）作品に着手する。画中に鞆、リュック、封筒、傘などが用いられ、伝統的な芸術概念、絵画という形式を超える試みの一つとみなされる。また 60 年代を通じ、一連のハプニングを公衆の参加を促しつつ行って、現実の生活へと介入し、人々を攪乱した。1975 年には舞台作品『死の教室』で、亡霊のような顔色の悪い登場人物たち（死者たち）が、子ども時代のマネキンを抱いて集まり、粗末な教室を舞台に死者の記憶と歴史とが入り混じる姿を描いて一躍世界の注目を集めることとなった。特に、悪夢の中に迷い込んだような、方向の失われた堂々巡り、言葉遊びやグロテスクにも思えるナンセンスさは、観る者を不安にさせるが、同時にいきなり心を驚掴みにされるような強烈な衝撃をもたらす。カントルはこれ以後国内外で次々と演劇上演を続けながら、並行して平面や立体作品の制作も精力的に行い、高く評価された。上演時、彼は舞台上に常に存在し、観客と舞台との間に位置しつつ時折役者たちに指示を出すような身振りで、いわば演劇の指揮者として、過去の記憶や歴史と現在とを繋いだ。カントルの芸術における「死」への接近、現実や日常性への注目、社会への介入と攪乱といった、ジャンルにこだわらない幅広くユニークな活動は同時代の人々に大きな影響を与え、近年は再評価の機運も高まっている。とりわけ、5 作の演劇作品は、伝統的演劇概念に挑戦し、刷新するものである。本研究では、以上述べたような広範な活動を繰り広げたカントルの芸術活動の意義について、改めて今日的観点より再編集と再解釈を目指し、中でも彼の美術と演劇をつなぐものとして、前衛的パフォーマンスの重要性、それがもたらした身体表現の可能性について論じる。視覚芸術と上演芸術をつなぐ点が極めて重要であり、また今日における創造的活動の可能性へと開かれる。その活動範囲の広さと独自性に注目しながら、カントルの同時代そして後に続く世代への影響関係も明らかにし、そのことにより 21 世紀における芸術の可能性について論じる。

### 3. 研究の方法

タデウシュ・カントルについて、2014 年 5 月より東京と京都で継続して毎月交互に研究会を実施していたが、こうした成果を踏まえつつ、2015 年秋には京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA にて「死の劇場 カントルへのオマージュ」展を開催し、若手中堅作家たちによるカントル解釈が試みられ、またパフォーマンスやワークショップを実施し、研究者や演出家を交えてのシンポジウムも開催し、カントルの演劇や身体表現の影響関係について考えた。ポーランドのカントルのアーカイブ展示研究施設であるクリコテカ（クラクフ）や、国立演劇インスティテュートとも連携し、カントルの演劇、パフォーマンス調査ならびに文献収集を実施した。カントル財団のレフ・スタンゲルト氏やウッチ国立美術館館長のヤロスワフ・スーハン氏、クラクフ現代美術館館長のマリア・ポトツカ氏らとも意見交換を行った。国内外の演劇ならびにパフォーマンスの調査も継続的に実施し、非言語コミュニケーションの連鎖によるワークショップ「昼の家、夜の家」からは、身体行為とイマジネーションから浮かび上がる共同作業としての芸術行為の可能性について大きな示唆を得た。日本とポーランドの中堅若手作家に注目するグループ展「セレブレーション」を日本とポーランドで実施し、ポーランドから美術評論家のアンダ・ロッテンベルク氏を招いて講演会を開催した。

### 4. 研究成果

20 世紀後半を代表するポーランドの美術家・演劇家であるタデウシュ・カントル(1915 - 1990)の創造活動における身体と記憶に注目しつつ研究を行い、カントル生誕 100 周年を記念した展覧会「死の劇場 カントルへのオマージュ」と連続研究会、シンポジウム、上映会等の実施によってカントルの目指したものの今日的再編集、再解釈を行った。特に前衛的パフォーマンスの重要性や現代美術における身体表現の可能性について検証し、ポーランドの作家、パヴェウ・アルトハメルとアルトゥル・ジミェフスキを講師に招いて行った「昼の家、夜の家」ワークショップでは、非言語コミュニケーションの連鎖の場で、演劇と美術の交わる場での共同作業の可能性を探り、ワークショップ参加者と共に大きな学びと発見へとつながった。更に国内外での調査及び文献の収集を継続し、2019 年にはクラクフ国際文化センターの「Thesaurus Poloniae」により 3 か月クラクフに滞在し、集中して調査研究およびまとめに着手できた。また同年、日本とポーランドにて両国の若手中堅作家から構成する「セレブレーション：日本ポーランド現代美術展」を実施し、その起点としてのカントルを参照点に、両国において美的感性がいかに変容し、交わりつつあるのかを示すと共に、歴史、記憶、死や日常性に着目し、作品調査と考察を行い、また芸術表現の可能性について論じた。本研究の成果をまとめたものとして、2020 年度内に『カントルからポーランド前衛美術の発展と継承』を創元社より出版予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Akiko Kasuya	4. 巻 20
2. 論文標題 Workshop "House of Day, House of Night": on the role of art in our society and the new possibilities for the academy	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of ICA 2016 "Aesthetics and Mass Culture"	6. 最初と最後の頁 pp. 494-501
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Akiko Kasuya	4. 巻 2
2. 論文標題 An Open Design Theory for Society: From Oskar Hansen's "Open Form" to Grzegorz Kowalski's "Common Space, Private Space"	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The 2nd Asian Conference of Design History and Theory, Design Education beyond Boundaries	6. 最初と最後の頁 pp.89-95.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 2189-7166	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 加須屋明子	4. 巻 64
2. 論文標題 タデウシュ・カントル 身体と記憶－美術と演劇の相関関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加須屋明子	4. 巻 634
2. 論文標題 ポーランドからの「窓の中の窓」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代の眼	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 加須屋明子
2. 発表標題 中欧の現代美術 コモン・アフェアーズ？
3. 学会等名 「中欧の現代美術」シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Akiko Kasuya
2. 発表標題 An Open Design Theory for Society: From Oskar Hansen's "Open Form" to Grzegorz Kowalski's "Common Space, Private Space"
3. 学会等名 The 2nd Asian Conference of Design History and Theory（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加須屋明子
2. 発表標題 「昼の家、夜の家」 P. アルトハメルとA. ジミエフスキの活動を中心に
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Akiko Kasuya
2. 発表標題 "House of Day, House of Night": On the Role and Possibilities of Art in Our Society
3. 学会等名 27th International Congress of Aesthetics（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Akiko Kasuya
2. 発表標題 Celebration: Between the Aesthetic and the Critical
3. 学会等名 Jiki Hitsu THE SIGNATURE OF THE ARTIST TRADITION IN CONTEMPORARY POLISH ART CONFERENCE (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akiko Kasuya
2. 発表標題 History of Museum in Japan and the character of its collection
3. 学会等名 COLLECTIONS; ENCOUNTERS; INSPIRATIONS (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akiko Kasuya
2. 発表標題 Ephemeral Poetics: Between the Aesthetic and the Critical Focus on the Japan-Poland Contemporary Arts Exhibition
3. 学会等名 21st International Congress of Aesthetics (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 加須屋明子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 龍野アートプロジェクト実行委員会	5. 総ページ数 92
3. 書名 龍野アートプロジェクト2018	

1. 著者名 Cwierka, Ewa Machotka (ed.), Akiko Kasuya	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Amsterdam University Press	5. 総ページ数 264
3. 書名 Consuming Life in Post-Bubble Japan A Transdisciplinary Perspective,	

1. 著者名 Katarzyna J. Cwierka, Ewa Machotka(ed.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Amsterdam University Press	5. 総ページ数 268(pp.237-251)
3. 書名 Consuming Life in Post-Bubble Japan A Transdisciplinary Perspective,	

1. 著者名 加須屋明子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都市立芸術大学	5. 総ページ数 288
3. 書名 タデウシュ・カントル生誕100周年記念事業 記録集	

1. 著者名 加須屋明子ほか(共著)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA	5. 総ページ数 128
3. 書名 タデウシュ・カントル生誕100周年記念展 死の劇場 カントルへのオマージュ	

1. 著者名 加須屋明子ほか（共著）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA	5. 総ページ数 144
3. 書名 Artist Workshop @KCUA House of Day, House of Night (昼の家、夜の家)	

1. 著者名 加須屋明子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都市立芸術大学	5. 総ページ数 78
3. 書名 セレブレーション 日本ポーランド現代美術展	

1. 著者名 加須屋明子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 240（予定）
3. 書名 カントルからーポーランド前衛美術の発展と継承	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----